

「貴族詩篇」という用語をめぐる

太 田 英伶奈

はじめに

ビザンティンの挿絵入り詩篇写本は、その挿絵形式により「余白詩篇」と「貴族詩篇」の2種に大別される。「余白詩篇」は当初「修道院詩篇」と呼ばれていたが、これらの詩篇写本を修道院と殊更に結びつけるのは不適切であると判断され、呼称を改められたものである⁽¹⁾。ところが、「貴族詩篇」という用語の妥当性については甚だ問題が多いにも拘わらず、今日に至るまで広く使用されてきた。筆者自身もこれまで無批判に「貴族詩篇」という語を用いて論文投稿や発表報告を行ってきたが、今後研究を進めるにあたって一度、研究対象とする用語の定義について自らの立場を明らかにする必要がある。まず、「貴族詩篇」の語が最初に用いられた際の定義と、その後の受容と使用の歴史を追い、用語にまつわる主要な問題を確認する。次に、アンソニー・カトラーが1984年に上梓した貴族詩篇のカタログ⁽²⁾において、貴族詩篇から除外した若干の作例と他の標準的な貴族詩篇の装飾プログラムを比較し、カトラーの分類が真に有効であるかを問う。その上で、筆者が考える貴族詩篇の定義を明らかにし、これに該当すると判断した作例をリスト化する。最後に、注文主が判明している貴族詩篇7作例のうち5作例が修道僧・修道尼による注文作であることを指摘し、再び「貴族詩篇」という言葉の妥当性を問う。

ビザンティン詩篇写本の定義

本論に入る前に、筆者が考えるビザンティン詩篇写本の定義を記す。今後筆者が論文や発表報告などの研究成果で「ビザンティン詩篇写本」と言った場合、以下の条件をすべて満たす写本を指す。

- ①本文がギリシア語で筆写されているもの。ギリシア語と他言語が併記された写本は含む。ギリシア語をラテン・アルファベット等で音写しているものは除く。
- ②写本の一部にまとまった詩篇のテキストを含むもの。四福音書との合冊や、旧約聖書諸本を収録した写本は含む。様々な断片を合冊した写本で、そのうちの一部分が詩篇のテキストであるものも同様に含む。本文を含まない詩篇註解は除く⁽³⁾。
- ③330-1453年間に制作された写本。こうした年代の設定は無意味という向きもあるだろうが、ど

こかで制限を設けなくては議論が際限なく広がってしまう。特にコロフォンがない15世紀の写本はビザンティン帝国滅亡後の1454年以降に該当する恐れがあるため除く。

「貴族詩篇」という用語の起源と受容

詩篇はカトリックと正教のどちらでも旧約聖書中最も重要な書と位置づけられ、特にビザンティン世界では個人的な祈りや子女の教育に至るまで、人々の生活で大きな役割を果たしていた⁽⁴⁾。当時盛んに制作されたためか、詩篇は旧約・新約聖書諸本を記載した写本としては四福音書、レクショナリーの次に現存作例が多い。筆者が現在把握している限りでも、ギリシア語の詩篇写本は506点を数える⁽⁵⁾。このうち、約2割にあたる89写本⁽⁶⁾に何らかの挿絵⁽⁷⁾が施されている。こうしたビザンティンの挿絵入り詩篇写本は早くから研究者の注目を集め、1895年にフィンランドの研究者ヨハン・ティッカネンが発表した著書 *Die Psalterillustration im Mittelalter*⁽⁸⁾はその後のビザンティン挿絵入り詩篇写本の研究における一種のメルクマールとなった。すなわち、彼の著書において初めて「修道院詩篇」と「貴族詩篇」という概念が提示されたのである。

ティッカネンはビザンティンの挿絵入り詩篇写本を挿絵の特徴や形式から修道院詩篇と貴族詩篇の2種に大別した。ビザンティンの詩篇写本に付される挿絵にはフォリオの余白部分に多数の小さな挿絵を描くものと、ダヴィデの生涯からのエピソードを全頁大で描くものがあるということ自体は、すでに1875年にロシアのフョードル・ブスラーエフが指摘していた⁽⁹⁾。しかし、こうした挿絵の形式の違いについて、修道僧と貴族階級という異なる社会的グループの寄与を示唆したのはティッカネンが初めてであった。「修道院詩篇」という呼称の由来は、該当する作例の一つである《テオドロス詩篇》(大英図書館 Add. MS. 19. 352) のコロフォンに当写本がコンスタンティノポリスのストゥディオス修道院長の注文で制作されたと明記されていることによる⁽¹⁰⁾。修道院詩篇の他の作例についても、詩篇では言及されない新約聖書のエピソードが挿絵として付される、あるいはフォリオをまたいだ挿絵同士で重層的な解釈ができる場合がある等、鑑賞には豊富な神学的知識が必要なため、修道院で制作されたものと理解されていた。該当する作例は、研究者によって数え方は異なるものの10写本⁽¹¹⁾が現存する。ところが、既に1932年には《テオドロス詩篇》以外の作例が必ずしも修道院で制作されたとは云えない可能性が指摘されていた⁽¹²⁾。さらに、挿絵の形式的には修道院詩篇に分類されるはずのヴァティカン聖徒図書館 cod. Barb. gr. 372 (以下 Vat. Barb. gr. 372) は《テオドロス詩篇》と同じくストゥディオス修道院で制作されたにも拘わらず、注文主が皇族であると判明した⁽¹³⁾。こうした事情を考慮して近年では修道院詩篇の呼称は殆ど使用されず、挿絵の形式から余白詩篇と呼ばれる。本稿においても以降余白詩篇の呼称を使用する。

これに対して、もう一つのグループである貴族詩篇については、ティッカネンはこれといった

定義をしなかった上に、なぜそれらが「貴族的」と考えられるかも明らかにしなかった。実際、ティッカネンは著書の中の一章のタイトルに「貴族詩篇 (Die aristokratische Psaltergruppe)」という言葉を使っただけで、他の部分にはこの用語は一度も登場しない⁽¹⁴⁾。ティッカネンが貴族詩篇としてまず挙げた作例は、10世紀の作と目される《パリ詩篇》(パリ国立図書館 cod. gr. 139) である⁽¹⁵⁾。当写本には詩篇の冒頭と末尾に合計14枚の挿絵があり、そのすべてがフォリオいっぱい描かれている。挿絵の構図、丁寧な筆致、顔料の質、古典的な人体表現を極めて忠実に再現する試みが見られる点から、当時の一流の画家によって描かれたことは誰の目にも明らかである。さらに羊皮紙の質の高さ、長辺36cmに迫る写本の巨大さ、本文の精緻で流麗な筆跡に鑑みると、当写本は当時の宮廷工房で制作されたというのが定説⁽¹⁶⁾である。ティッカネンは《パリ詩篇》の極めて豪華な挿絵を余白詩篇のより質素な挿絵と鋭く対立するものと見なし⁽¹⁷⁾、恐らくそれが理由で貴族詩篇という言葉を考えついたのであろう。しかし、《パリ詩篇》はあらゆる点で非常に特異な作例であり、これを貴族詩篇の基準とするのにはそもそも無理がある。加えてビザンティンの宮廷写本工房は、恐らく存在したであろうとは云われているものの、その実態については何も詳らかにされていない。したがって、貴族詩篇という用語の歴史には初めから多くの問題があったと云わざるを得ない。こうした経緯を受け、早くも1929年にはルイ・ブレイエが貴族詩篇を「フロンティスピース巻頭挿絵詩篇」と言い換えている⁽¹⁸⁾。しかしこの呼称は定着せず、ハーバート・ケスラーが1973年にプリンストン大学美術館で行われた展覧会のカタログに寄せた解説文において用いている程度である⁽¹⁹⁾。貴族詩篇という語に違和感を抱きつつも、現状では相変わらず多くの研究者がこの言葉を用いている。

ティッカネンはパリ詩篇に類似する写本を7作例⁽²⁰⁾挙げたが、これらの写本の共通性については特に研究しなかった。極めて曖昧模糊とした貴族詩篇の定義に具体的な案を提出したのがシラルピー・デル・ネルセシアンであった。彼女はワシントンDCのダンバートン・オークス研究所 MS. 3 (以下 D.O. 3) の挿絵を取り上げ、貴族詩篇を次のように定義した。

数は決まっていないものの、詩篇第1篇の前にダヴィデの生涯と彼の肖像を描いた挿絵がつく。詩篇本文中には第50篇と77篇、そして151篇にのみ挿絵が付される。それに頌歌の挿絵が続く。⁽²¹⁾

実際に D.O. 3 の挿絵を確認すると、確かに詩篇第1篇の前にダヴィデ伝に取材した挿絵が1枚、ダヴィデの肖像が2枚、第50篇、77篇、151篇にそれぞれ挿絵が1枚ずつ、そして頌歌の挿絵が複数枚ある⁽²²⁾。50篇と77篇に挿絵がない貴族詩篇も非常に多いのでデル・ネルセシアンの定義も充分とは云えないのであるが、概ね貴族詩篇の特徴を捉えてはいる。つまり、余白詩篇と貴族詩篇では挿絵の形状だけでなく、挿絵の入る箇所が大きく異なっているのである。異なっている

というより、余白詩篇では万遍なくどの詩篇にも挿絵が付され、詩篇の逐語的絵画化と全面的解釈が目的であるのに対して、貴族詩篇は挿絵の数が圧倒的に少なく、挿絵の入る箇所も決まっており、挿絵がまるで特定の詩篇のインデックスかアイコンのように機能している、と言った方が適切であろうか。

以上、貴族詩篇という用語の歴史を追い、用語にまつわる主な問題が①最初にこの用語を提案したティッカネンが定義を明確にしなかったこと、②その後も定義が曖昧なまま用いられてきたこと、③用語の由来に関しては印象論に終始しており、確実な根拠がないことの3点にあると確認できた。恐らくこの問題をうやむやにしたまま研究が続けられたことが、以下に見る通りカトラーのカatalogにおける不可解な写本の分類に帰結したのである。

カトラーの分類の問題点

アンソニー・カトラーは1984年に発表した貴族詩篇のカatalog *The Aristocratic Psalters in Byzantium* で、デル・ネルセシアン⁽²³⁾の定義が自らの理想に最も近いとしてこれを採用し、定義に該当する写本を47作例⁽²⁴⁾挙げた。カトラーはダヴィデの全頁大挿絵が冒頭に1枚あるだけでは貴族詩篇と呼ぶに値しないとして、アトス山スタヴロニキタ修道院 cod. 46や同パントクラートル修道院 cod. 234をカatalogから除外した⁽²⁵⁾。一方で、詩篇第77篇に「律法を受け取るモーセの挿絵」があれば、たとえそれがその写本における唯一の挿絵だったとしても貴族詩篇に含めるべきと断言している。このことから、カトラーにとっての貴族詩篇の定義は恐らく「詩篇第1篇の前のダヴィデ伝や彼の肖像はあってもなくても良いが、少なくとも第50篇と77篇、そして151篇のどれかには決まった題材の挿絵が付されている必要がある」というものであろう。決まった題材の挿絵というのは、例えば第50篇には「ダヴィデを糾弾するナタンと悔悛するダヴィデ」、第77篇には「神から律法を受け取るモーセ」といったように、多くの作例で挿絵の題材に共通性があることを指す。こうした点を理由に、カトラーは自らの定義から外れる「貴族詩篇に非常に近いが貴族詩篇とは呼べない作例」として7写本⁽²⁶⁾をカatalog本編から除き、補遺に記載した。このうちプリンストン大学美術館 acc. no. y1930-20⁽²⁷⁾については全頁大挿絵が描かれたフォリオ1枚を残して写本の全てが失われており、しかもこの挿絵が詩篇第8篇7節から10節に付されたものであることから、確かに貴族詩篇とは呼べない。しかし残りの6写本については、カトラーの分類は極めて恣意的で、疑義を挟む余地がある。というのも、これら除外された6写本の装飾プログラムには、カatalog本編に記載された写本の装飾プログラムと比べて根本的な差異がないからである。例えばベナキ美術館 cod. 68は「ほぼ全ての詩篇に挿絵が付されている⁽²⁸⁾」という理由で除外されているが、第50篇には「ダヴィデを糾弾するナタンと悔悛するダヴィデ」、第77篇には「イスラエル人に律法を説くダヴィデ」、そして第1頌歌に「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」の全頁大挿絵があり、貴族詩篇の要件を満たしている。ディオニシウ修道院 cod. 65は第1篇の



図1 「ハバクク」 (fol. 249v)



図2 「イザヤ」 (fol. 252v)



図3 「ヨナ」 (fol. 253v)

前に合計7枚の全頁大挿絵が挿入されているが、カトラーはこれらすべてが「ダヴィデの生涯と関係のない挿絵である⁽²⁹⁾」として当写本を除外している。しかし、その一方でカトラーはダヴィデの生涯はおろか詩篇と関係のある挿絵が一点もない写本、エルサレム総主教座図書館 cod. Taphou 55をカタログ本編に掲載⁽³⁰⁾しているのである。Taphou 55の詩篇本文には、第1篇と77篇に植物文のヘッドピースがあるだけで、人物像を含むいかなる挿絵もない。頌歌には挿絵があるが、その殆どがメダイヨン形式という貴族詩篇では珍しい枠を採用している(図1-3)。さらに、当写本に1枚だけある全頁大挿絵は頌歌のテキストが終わった後に挿入された、聖母マリアと注文主である修道僧マテオスを描いたもの⁽³¹⁾(図9)で、明らかに詩篇と直接関係がない図像である。もしカトラーが当写本をカタログ本編に含めた理由が「頌歌には挿絵が付されているから」だとしたら、彼は貴族詩篇における最大の形式的特徴である「詩篇本文に付随する全頁大挿絵」という要素を無視したことになる。したがってカトラーの貴族詩篇の定義および分類はそもそも明確な基準の存在しない、不確かなものであり、その有効性にはいささか疑問点が多いように思われる。

カトラーは自らの分類における矛盾については無自覚であったようだが、「貴族詩篇」という用語の妥当性に疑問があることは認めている⁽³²⁾。自身が貴族詩篇と判断した作例の中に、確実に貴族が注文したと判る作例がなかったためである。その一方で、彼は貴族詩篇を特徴づける全頁大の挿絵にちなんで「全頁大詩篇 (psautier à pleine page⁽³³⁾)」と呼ぶことを拒否し、現状では貴族詩篇に代わる用語はないとしている⁽³⁴⁾。カトラーが「全頁大詩篇」の呼称を退けたのは、自身が貴族詩篇であると考えた作例の多くは全頁大の挿絵を一部しか採用していないからであろう。例えば大英図書館 Add. MS. 11. 836では、詩篇第1篇ならびにモーセの第1頌歌の挿絵は全頁大であるが、他の頌歌の挿絵はコラム・ピクチャーである。全ての挿絵が全頁大である《パリ詩篇》はむしろ異例で、「全頁大詩篇という呼称は混乱を招く」というカトラーの見解には一部頷ける。しかし、デル・ネルセシアン⁽³⁵⁾の定義には、挿絵がすべて全頁大でなくてはならないなどとは書かれていない。筆者も貴族詩篇の挿絵形式における最大の特徴は、一部が全頁大である、

という点にあると考える。余白詩篇の中にも全頁大挿絵を伴う作例が10例中4例⁽³⁵⁾あるが、多くてもせいぜい1つの写本につき2枚で、明らかに挿絵の形式として重視されていない。余白詩篇と貴族詩篇の挿絵における今一つの重要な相違点は、貴族詩篇には余白詩篇のような逐語的・註解的な挿絵が見られない、ということである。逐語的な挿絵というのは、1篇の詩篇に複数の挿絵をつけて、その篇全体をなるべく逐語的に絵画化しようという企図が表れている挿絵を指す。例として、Vat. Barb. gr. 372の第50篇には都合5つの挿絵が付されている⁽³⁶⁾。貴族詩篇で同じことを試みると、全頁大挿絵の数を増やすか、全頁大挿絵と余白挿絵を共存させるかの二つに一つしかあり得ない。前者は写本に綴じられるフォリオの数に上限があるため物理的に非現実的であり、後者は本文を筆写する際に十分な余白を確保すれば実現可能だったはずであるが何故か試みられた例がない。もう一方の註解的な挿絵⁽³⁷⁾というのは、挿絵を付した詩篇の本文では言及されていないとも神学上関係があると解釈される図像が描き込まれた挿絵で、文字に代わって当該の詩篇を註解する機能を担っている。例えば《テオドロス詩篇》の38篇2節(fol. 46v)には、ペテロと向かい合うキリストが描かれている(図4)。二人とも詩篇とは直接関係のない人物であるが、38篇2節の「私は言った。我が道を守ろう、我が舌で過たぬように。(私の前に) 罪びとがいる間は、我が口を閉ざしておこう⁽³⁸⁾」と、同18節の「主よ、我が祈りと嘆願に耳傾けて下さい。我が涙に黙したまま通り過ぎないで下さい」という文言が、キリストに「はっきり言っておく。あなたは今夜、鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」(マタ26: 34)と言われ、その後実際にキリストの預言が成就したことに気づいて激しく後悔するペテロの物語と重ね合わせられているため、ここにキリストとペテロの姿が描き込まれているのである⁽³⁹⁾。貴族詩篇においてはこのような、観る者に神学的な素養あるいは連想を要求する挿絵は見られない。



図4 「ペテロとキリスト」

これまで述べた点を踏まえ、筆者が現時点で考える貴族詩篇の定義は以下の通りである。

- ①冒頭に述べたビザンティン詩篇写本の条件を満たし、
- ②1枚でも全頁大挿絵があり、
- ③それが詩篇第1篇、50篇、77篇、151篇、各頌歌のどれかに付されており、
- ④欄外に逐語的・註解的な挿絵がない写本。

カトラーとは異なり、筆者は挿絵の内容については特に問わない。もちろん、完璧な定義など存在しないことは承知の上である。ジョン・ラウデンが「余白詩篇と貴族詩篇を分けて考えるべきではない⁽⁴⁰⁾」と主張する通り、確かに2つのグループを分けて議論を進めることで、研究者の目を逃れてしまう事実は多いのかもしれない。しかし、挿絵形式のこれほど大きな相

違を考慮しないとしたら不自然ではないだろうか。筆者が考える定義に該当する写本は、補遺に記載した通り74写本を数える。下線が引かれているものは、カトラーが除外した、もしくは見落としたために彼のカタログに記載されなかった写本である。中には図版が入手できず、言語的なディスクリプションのみで該当の可否を判断した作例もあるため、今後の調査・研究の進行具合によってこのリストに若干の変更が生じる可能性はある。

なお、今回の分類の過程で貴族詩篇の定義から外れていると筆者が判断し、かつ余白詩篇にも該当しない写本5作例⁽⁴¹⁾が存在することが判明したが、この5写本の位置付けについてはいずれ稿を改めて考察したい。

「貴族詩篇」という用語の妥当性——注文主の問題

先に述べた通りカトラーは貴族詩篇という用語に疑問を持ちつつも、これに代わる用語を提案しなかった。不本意ながら、筆者もカトラーと同じ石に躓いている。というのも、余白詩篇は基本的に全作例の挿絵形式が余白挿絵であり、これから大きく逸脱する作例はない。一方貴族詩篇の場合、確かに全頁大挿絵が全作例の一部に見られるものの、コラム・ピクチャー等異なる形式の挿絵も混在する作例が殆どであり、「全頁大詩篇」とは厳密には呼び得ない。ならば貴族詩篇を注文したパトロンのグループや、完成した写本が供した主たる用途から新たな用語を命名しようと考えてみるが、この方面についても不確実な要素が多いため実りが薄い。貴族詩篇がもはや適切な用語ではないと知りつつも、名称とそれが示す写本群との間に直接の関係はないと明示した上でこの用語を使い続けるほか無いというのが、苦しいながらも現時点では次善の策と認めざるを得ない。しかし、「貴族詩篇」という用語が妥当でないさらなる理由として注文主の問題を以下に取り上げ、本稿の結びとする。

余白詩篇と貴族詩篇が異なる社会的グループによって作られたという仮説が受け入れがたいことはクルト・ヴァイツマンによって既に1973年に指摘されていた⁽⁴²⁾。とはいえ、ヴァイツマンは単に挿絵の様式に注目してこのように批判したに過ぎず、注文主の問題には立ち入らなかった。貴族詩篇には、挿絵とそれに付された銘文から注文主が判明している作例が7点⁽⁴³⁾ある。すなわち、

ベナキ美術館 cod. 68：僧バルナバス⁽⁴⁴⁾（図5）

ディオニシウ修道院 cod. 65：僧サバス⁽⁴⁵⁾（図6）

クライスト・チャーチ・カレッジ MS. Gr (Wake). 61：僧カロイダス⁽⁴⁶⁾（図7、写字生はオディゴン修道院のヨアサフ）

アギア・エカテリニ修道院 cod. gr. 61：尼僧テオティミ⁽⁴⁷⁾（図8）

マルチャーナ図書館 cod. gr. Z. 17：皇帝バシリオス2世⁽⁴⁸⁾

サンクトペテルブルク国立図書館 cod. gr. 214：皇帝ミカイル7世ドゥカスもしくはマリア・

である。このうち下の2写本はそれぞれ皇族の注文作であるが、その他の4作例は修道僧もしくは修道尼によって注文されている。Taphou 55は筆者が貴族詩篇の定義から外れると判断したので参考作例として扱うが、これもマテオスという名の修道僧による注文作である(図9)⁽⁵⁰⁾。さらに、個人の特定はできないものの注文主らしき人物が描かれている作例が4写本⁽⁵¹⁾あり、その全てが修道僧と思しき外見を呈している。1作例のみ、修道僧の他に豪華な衣装を纏った貴族と思しき人物が描かれたもの⁽⁵²⁾があり、これについては解釈に迷うところであるが、いずれにしろ修道僧らしき人物が存在している点に違いはない。この事実にのみ着目すれば、貴族詩篇と呼ばれる写本の多くは実は修道僧・修道尼⁽⁵³⁾によって注文されたということになり、貴族詩篇の語はやはり相応しくないと云えよう。冒頭で Vat. Barb. gr. 372が皇族の注文によることが判明したために、修道院詩篇は挿絵形式に準じて余白詩篇と呼ばれるようになったと述べた。そうであれば、貴族詩篇についても同様にするのが理に適っているだろう。貴族詩篇に代わる、より適切な用語を考案できるかは、筆者の今後の研究における大きな課題である。また、注文主の問題は挿絵の様式論よりも確実に貴族詩篇の制作背景に迫れる鍵であるにも係わらず、何故か先行研究でほとんど取り上げられることがなかった。筆者は今後、これら修道僧・修道尼が注文したと思われる作例に何らかの共通点がないか調査し、同じ修道僧・修道尼という社会的グループの中で余白詩篇と貴族詩篇の両方が制作されたのだとしたら、どちらにするかを選ぶ基準は何であったのかを考察する手がかりとならないか、研究を進める予定である。



図5 「聖母マリアと僧バルナバス」
(fol. 175v)



図6 「僧サバスの魂を受け取る天使・魂の計量」
(fol. 111v)



図7 「僧カロイダスを石棺から立ち
上がらせる聖母マリア」
(fol. 102v)



図8 「聖母子と尼僧テオティミ」
(fol. 256v)



図9 「聖母子と僧マテオス」
(fol. 260r)

補 論

筆者は余白詩篇と貴族詩篇を分ける基準として、挿絵の形式以外にスティコメトリー（行送り法）の違いがある可能性を検討した。スティコメトリーとは文章を書く際に、その意味やリズムに応じて行数を設定する筆記法を指す。ビザンティン詩篇写本の場合、首都のアギア・ソフィア大聖堂の典礼の中で発展したコンスタンティノポリス方式と、エルサレムの聖墳墓聖堂ならびにサバ修道院の典礼に沿って発展したエルサレム方式の2つのスティコメトリーがあり、コンスタンティノポリス方式では全体の行数は2,542行、エルサレム方式では4,782行と、同じ本文を筆写していてもコンスタンティノポリス方式の詩篇写本はエルサレム方式のそれより一行が2倍近く長いという計算になる⁽⁵⁴⁾。2つの方式は行数だけでなく、詩篇本文をいくつかの纏まったユニットとして分ける際の分け方も異なっており⁽⁵⁵⁾、どちらの方式を採用するかによって詩篇の詠唱の方法にも相当の違いを来すのであるが、紙面の都合上ここでは深く立ち入らない。余白詩篇の古い作例である《クルドフ詩篇》、パリ国立図書館 cod. gr. 20、パントクラートル修道院 cod. 61がすべてコンスタンティノポリス方式で筆写されていることは既にパレンティが指摘している⁽⁵⁶⁾。さらに、エルサレム方式が首都に導入されたのは10世紀以降と云われている。貴族詩篇には11世紀以降の作例が多いことから、貴族詩篇の本文がエルサレム方式で筆写されており、かつ余白詩篇の全作例がコンスタンティノポリス方式で筆写されていれば、挿絵の形式の違いはスティコメトリーの違いと連動していると考えられる。しかし余白詩篇である《テオドロス詩篇》はエルサレム方式で筆写されているとハインリヒ・シュナイダーが明らかにしていた⁽⁵⁷⁾ため、この可能性は潰えた。他の作例のスティコメトリーについても各写本の第1詩篇の行数を数えた⁽⁵⁸⁾が、余白詩篇と貴族詩篇それぞれにコンスタンティノポリス方式とエルサレム方式が混在しており、スティコメトリー自体は挿絵形式の選択と関係ないことが確実となった。そこで今度は《テオドロス詩篇》が余白詩篇の中でもやや時代が降る作例であることから、スティコメトリーは挿絵形式ではなく単に時代の流行と関係しており、10世紀まではコンスタンティノポリス方式、それ以降にエルサレム方式が好まれた可能性を検討した。確かに余白詩篇の初期作例にエルサレム方式を採用するものはないが、12世紀以降の貴族詩篇で、ハーヴァード大学ホートン図書館 MS. Gr. 3のようにコンスタンティノポリス方式を採用する作例が少なからず存在し、時代の違いもスティコメトリーの選択には寄与していないことが判明した。スティコメトリーの相違がビザンティン詩篇写本を分類する上で何らかの鍵となるのか、現時点で明らかにできることは少ないが、今後も留意して研究を続けたい点である。

補遺：ビザンティン挿絵入り詩篇写本リスト

貴族詩篇（下線はカトラーのカタログに記載がないもの）

1. Athens, Benaki Museum, cod. 68 (vitr. 34. 3) (12世紀末)
2. Athens, National Library, cod. 7 (12世紀後半)
3. Athens, National Library, cod. 15 (1180年ごろ)
4. Athens, National Library, cod. 16 (14世紀)
5. Athens, National Library, cod. 47 (12世紀末)
6. Athos, Dinoysiou, cod. 33 (13-14世紀)

他箇所所蔵分：St Petersburg, National Library, cod. gr. 270

7. Athos, Dionysiou, cod. 60 (14世紀)
8. Athos, Dionysiou, cod. 65 (12世紀前半)
9. Athos, Gregoriou, cod. 4 (157) (1108年ごろ)
10. Athos, Lavra, cod. A13 (12世紀?)

他箇所所蔵分：Bath, 個人蔵 (fol. 210bis)

11. Athos, Lavra, cod. B24 (12世紀)
12. Athos, Lavra, cod. B25 (14世紀後半)
13. Athos, Lavra, cod. B26 (12世紀後半)
14. Athos, Simopetra, cod. 35 (13-14世紀?、1891年に焼失)
15. Athos, Skete Eliou, cod. 1 (逸失)
16. Athos, Stavronikita, cod. 46 (12世紀)
17. Athos, Stavronikita, cod. 57 (13世紀?)
18. Athos, Vatopedi, cod. 760 (12世紀)
19. Athos, Vatopedi, cod. 761 (1088年ごろ)

他箇所所蔵分：Baltimore, Walters Museum, MS. W. 530B (fol. 111v)

20. Athos, Vatopedi, cod. 762 (11世紀末)

他箇所所蔵分：Baltimore, Walters Museum, MS. W. 530C

21. Athos, Vatopedi, cod. 851 (12世紀末)
22. Berlin, Universität, Abteilung für christliche Archäologie und kirchliche Kunst, cod. 3807
(11世紀末-12世紀初頭、第二次世界大戦時に焼失?)
23. Bologna, Biblioteca Universitaria, cod. 2952 (14世紀?)
24. Cambridge (MA), Harvard University, Houghton Library, MS. Gr. 2 (13-14世紀)
25. Cambridge (MA), Harvard University, Houghton Library, MS. Gr. 3 (1104/05年)
26. Chicago University Library, MS. 965 (12世紀、通称《ロックフェラー・マコーミック新

約聖書》)

27. Firenze, Biblioteca Medicea-Laurenziana, cod. Plut. 5. 17⁽⁵⁹⁾ (1403年)
28. Firenze, Biblioteca Medicea-Laurenziana, cod. Plut. 6. 36 (12世紀末)
29. Istanbul, Topkapı Sarayı Museum, cod. Gayri İslami Eserler 13 (12世紀後半)
30. Jerusalem, Greek Patriarchate Library, cod. Stavrou 88 (12世紀後半)
31. Jerusalem, Greek Patriarchate Library, cod. Taphou 51 (13世紀後半)
他箇所所蔵分: St Petersburg, National Library, cod. gr. 273; 274
32. Jerusalem, Greek Patriarchate Library, cod. Taphou 53 (11世紀)
他箇所所蔵分: St Petersburg, National Library, cod. gr. 266
33. Krakow, Jagielloan University Library, cod. ex. Berol. 8. 13⁽⁶⁰⁾ (12世紀後半)
34. London, British Library, Add. MS. 11. 836 (12世紀後半)
35. London, British Library, Add. MS. 36. 928 (1090年ごろ)
36. London, British Library, Add. MS. 39. 586 (11世紀前半)
37. London, British Library, Add. MS. 39. 589 (12世紀後半)
38. London, British Library, Add. MS. 40. 753 (12世紀後半)
39. London, British Library, Harley MS. 5535 (1284年)
40. Madrid, Biblioteca nacional, cod. vitr. 26-5 (14世紀前半)
41. Milano, Biblioteca Ambrosiana, cod. M. 47 sup. (10世紀)
42. Milano, Biblioteca Ambrosiana, cod. M. 54 sup. (11世紀半ば)
43. Milano, Biblioteca Ambrosiana, cod. + 24 sup. (9-10世紀)
44. Moscow, National Historical Museum (GIM), cod. Sinod. gr. 407 (本文12世紀、挿絵14世紀前半)
45. New York Public Library, Spencer Collection, Gr. MS. 1 (13世紀初頭)
46. New York, Metropolitan Museum, MS. acc. no. 2001. 730⁽⁶¹⁾ (12世紀末)
他箇所所蔵分: Samos, Metropolitan Library, cod. 105
47. Oxford, Bodleian Library, MS. Auct. D. 4. 1 (951年)
48. Oxford, Bodleian Library, MS. Barocci 15 (1104/05年)
49. Oxford, Bodleian Library, MS. E. D. Clarke 15 (1078年)
50. Oxford, Christ Church College, MS. Gr (Wake). 61 (1391年)
51. Oxford, Lincoln College, MS. Gr. 31 (12世紀後半-13世紀初頭)
52. Oxford, Trinity College, MS. 78 (11世紀末)
53. Palermo, Biblioteca centrale della Regione siciliana, cod. gr. Dep. museo 4 (12世紀末)
他箇所所蔵分: Philadelphia, Free Library, MS. Lewis E. M. 44: 27-28

54. Paris, Bibliothèque nationale, cod. gr. 139 (10世紀、通称《パリ詩篇》)
55. Paris, Bibliothèque nationale, cod. suppl. gr. 610 (11世紀)
56. Paris, Bibliothèque nationale, cod. suppl. gr. 1335 (12世紀末)
57. Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, cod. gr. 342 (1087/88年)
58. Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, cod. gr. 1210 (11世紀?)
59. Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, cod. gr. 1747 (10-11世紀)
60. Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, cod. Barb. gr. 285 (本文10世紀、挿絵14世紀)
61. Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, cod. Barb. gr. 320 (12世紀末)
62. Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, cod. Palat. gr. 381 (1300年ごろ)
63. Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, cod. Reg. gr. 1 (11世紀、通称《レオーンの聖書》)
64. St Petersburg, National Library, cod. gr. 214 (1074年ごろ)
65. Sinai, Agia Aikatherine, cod. gr. 38 (13世紀末)
他箇所所蔵分: St Petersburg, National Library, cod. gr. 269
66. Sinai, Agia Aikatherine, cod. gr. 44 (1122年ごろ)
他箇所所蔵分: St Petersburg, National Library, cod. gr. 268
67. Sinai, Agia Aikatherine, cod. gr. 48 (11世紀)
他箇所所蔵分: St Petersburg, National Library, cod. gr. 267
68. Sinai, Agia Aikatherine, cod. gr. 61 (1274年ごろ)
69. Sinai, Agia Aikatherine, cod. gr. 2123 (13世紀)
70. Venezia, Biblioteca Marciana, cod. gr. II. 113 (565) (11世紀末-12世紀前半)
71. Venezia, Biblioteca Marciana, cod. gr. Z. 17 (1004年ごろ、通称《バシリオス2世の詩篇》)
72. Venezia, Biblioteca Marciana, cod. gr. Z. 535 (11世紀)
73. Washington D. C., Dumbarton Oaks, MS. 3 (1084年ごろ)
他箇所所蔵分: Athens, Benaki Museum, cod. 66
Cleveland Museum of Art, MS. 50. 0154
Moscow, Tretjakov Gallery, cod. 2580
74. Wien, Nationalbibliothek, cod. theol. gr. 336 (1077年ごろ)

余白詩篇

1. Athos, Pantokrator, cod. 61 (9世紀)
他箇所所蔵分: St Petersburg, National Library, cod. gr. 265
2. Baltimore, Walters Museum, MS. W. 733 (14世紀初頭)
3. Berlin, Kupferstichkabinett der Staatlichen Museen Preussischer Kulturbesitz, cod. 78. A.

- 9 (13-14世紀初頭、通称《ハミルトン詩篇》)
4. London, British Library, Add. MS. 19. 352 (1066年、通称《テオドロス詩篇》)
 5. London, British Library, Add. MS. 40. 731 (10世紀末-11世紀初頭、通称《プリストル詩篇》)
 6. Moscow, National Historical Museum (GIM), cod. Khludov 129д (9世紀、通称《クルドフ詩篇》)
 7. Paris, Bibliothèque nationale, cod. gr. 20 (9世紀)
 8. Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, cod. Barb. gr. 372 (11世紀後半)
 9. Sinai, Agia Aikatherine, cod. gr. 48 (1075年)
 10. Verona, Biblioteca Capitoriale, cod. 1 (7世紀末-8世紀初頭)

どちらにも該当しない写本

1. Athos, Pantokrator, cod. 234 (13世紀)
2. Jerusalem, Greek Patriarchate Library, cod. Taphou 55 (12世紀末-13世紀初頭)
3. Princeton University Art Museum, MS. acc. no. y1930-20 (11世紀末)
4. Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, cod. gr. 752 (1058/59年)
5. Roma, Biblioteca Apostolica Vaticana, cod. gr. 1927 (12世紀前半)

図版出典

図1-3 : 'Library of Congress', <https://www.loc.gov/item/00279390003-jo/> (2018年5月11日最終閲覧)

図4 : 'British Library Digitised Manuscripts', http://www.bl.uk/manuscripts/FullDisplay.aspx?ref=Add_MS_19352 (2018年5月11日最終閲覧)

図5 : Cutler, Weyl Carr (1976), fig. 4.

図6 : Pelekanidis, S., et. al. (1974), *The Treasures of Mount Athos: Illuminated Manuscripts*, v.1, Athens, fig. 121.

図7 : Vocotopoulos (1976), πίν. 101.

図8 : Cutler (1984), fig. 411.

図9 : Vocotopoulos (2002), fig. 31.

註

文献略号は以下に従う。ArtB= *The Art Bulletin*, ByzSt= *Byzantine Studies*, CahArch= *Cahiers archeologiques*, DOP= *Dumbarton Oaks Papers*, ΔΧΑΕ= Δελτίον της Χριστιανικής Αρχαιολογικής Εταιρείας, REB= *Revue des études byzantines*.

「貴族詩篇」という用語をめぐる

- (1) 筆者は「余白詩篇」の語の初出を特定できていないが、遅くとも1932年のマリツキーの論考 (Malickij, N. (1932), 'Le psautier byzantin à illustrations marginales du type Chludov est-il de provenance monastique?' in Millet, G. et. al., *L'art chez les slaves : l'ancienne russie, les slaves catholiques*, v. 2, Paris, 235-243.) では表題に「余白詩篇」の語が見える。
- (2) Cutler, A. (1984), *The Aristocratic Psalters in Byzantium*, Paris.
- (3) Parpulov, G. (2014), *Toward a History of Byzantine Psalters ca. 850-1350 AD*, Plovdiv, Appendix B1に挙げられた写本のうち、詩篇本文を筆写しない詩篇註解本と思しき作例が複数含まれていたため、敢えてこのように記す次第である。
- (4) 高晟峻 (2007)、「『フルドフ詩篇』(モスクワ国立歴史博物館所蔵 Cod. gr. 129d) に関する諸問題」『新潟県立万代島美術館研究紀要』第2号、9頁。
- (5) 筆者が入手できた各所蔵箇所のカタログに掲載された詩篇写本の合計。
- (6) ジョン・ラウデンは85写本と報告している。Lowden, J. (1988), 'Observation on Illustrated Byzantine Psalters', *ArtB* 70 (2), note 13.
- (7) 単純な植物文や幾何学文の彩飾は、ここでいう挿絵に含まない。
- (8) Tikkanen, J. (1895-1900), *Die Psalterillustration im Mittelalter*, Leipzig.
- (9) Buslaev, F. (1930), 'Из Рима' (first published in 1875), *Сочинения Ф.И. Буслаева : сочинения по археологии и истории искусства*, v. 3, Leningrad, 214-24.
- (10) 辻絵理子 (2012)、「ビザンティン余白詩篇研究——『テオドロス詩篇』とストウディオス修道院工房」(早稲田大学博士論文)、27-29頁。
- (11) 補遺を参照。アギア・エカテリニ修道院 cod. gr. 48とサンクトペテルブルク国立図書館 cod. 1252. F. VI (通称『1397年詩篇』、'Президентская библиотека', <https://www.prilib.ru/item/465928> (2018年8月15日最終閲覧)) で全フォリオを閲覧可能) を数に含めるかは、研究者によって解釈が異なる。筆者は『1397年詩篇』については本文が教会スラブ語であるため余白詩篇から除外した。また、ギリシア語とラテン語の本文が併記されたカピトラレ図書館 cod. 1は現存するビザンティン挿絵入り写本としては最古級であるにも拘らず、挿絵の内容が他の余白詩篇と大幅に異なるためか、多くの先行研究で等閑視されている。
- (12) Malickij (1932). ただし、マリツキーの「修道院詩篇の全てが修道院で制作されたとは限らない」という結論は結果的に正しかったものの、彼が自説の根拠とした「『クルドフ詩篇』などの作例にはアギア・ソフィア大聖堂での典礼に関わる書き込みや記号が多々見られる」点については、アギア・ソフィア大聖堂とその他の修道院の典礼は共通部分も多く、かつて考えられていたほど厳格な区分はないというのが現在の定説である。Strunk, O. (1956), 'The Byzantine Office at Hagia Sophia', *DOP* 9/10, 175-202., Frøyshov, S. (2007), 'The Cathedral-Monastic Distinction Revisited Part I: Was Egyptian Desert Liturgy a Pure Monastic Office?', *Studia Liturgica* 37, 208-213を参照。
- (13) 当写本の fol. 5r には皇帝夫妻とその息子と思われる人物を描いた挿絵があることは早くから周知の事実であった。しかし挿絵の周囲に配された銘文にはこれらの人物の名前が含まれていないため、各人物の同定については諸説ある。諸家の説を概観し、批判的に検討した論考として Anderson, J. (1983), 'The Date and Purpose of the Barberini Psalter', *CahArch* 31, 35-67を挙げる。なお、アンダーソンは挿絵に描かれている人物がアレクシオス1世コムニノス (在位1081-1118年)、イリニ・ドゥケナ (1066年ごろ-1138年没)、二人の長男ヨアンニス2世コムニノス (在位1118-1143年) であり、ヨアンニス2世の共同統治帝への登位 (1092年) を記念して当写本が制作されたとの説を採る。
- (14) Cutler (1984), 8.
- (15) Tikkanen (1895-1900), 113.
- (16) 宮廷工房制作説の嚆矢はクルト・ヴァイツマンである。Weitzmann, K. (1929), "Der Pariser Psalter Cod. Par. Gr. 139 und die mittelbyzantinische Renaissance", *Jahrbuch für Kunstwissenschaft* 6, 178-94. ヴァイツマ

- ンの学説を踏まえた総合的な研究としては Buchthal, H. (1938), *The Miniatures of the Paris Psalter : A Study in Middle Byzantine Painting*, London が挙げられる。
- (17) Tikkanen (1895-1900), 124.
 - (18) Bréhier, L. (1929), 'A propos du psautier byzantin à frontispice', *Byzantion* 5, 32-45.
 - (19) Kessler, H. (1973), 'The Psalter', in Vikan, G. (ed.), *Illuminated Greek Manuscripts from American Collections: An Exhibition in Honor of Kurt Weitzmann*, Princeton, 31-33.
 - (20) アンブロジーナ図書館 cod. M. 54 sup., ベルリン大学 Abteilung für christliche Archäologie und kirchliche Kunst, cod. 3807、ダンバートン・オークス研究所 cod. 3 (*olim.* パントクラトール修道院 cod. 49)、ヴァトベディ修道院 cod. 761 (*olim.* 609)、ヴァティカン聖使徒図書館 cod. Palat. gr. 381、アギア・エカテリニ修道院 cod. gr. 38 (サンクトペテルブルク国立図書館 cod. gr. 269)、ヴァティカン聖使徒図書館 cod. Barb. gr. 320 (*olim.* III. 39)。Tikkanen (1895-1900), 128.
 - (21) Der Nersessian, S. (1965), 'A Psalter and a New Testament Manuscript at Dumbarton Oaks', *DOP* 19, 166-67.
 - (22) 'Harvard Library Viewer', <http://nrs.harvard.edu/urn-3:DOAK.MUS:9649615> (2018年8月15日最終閲覧) で写本の全フォリオを閲覧可能。
 - (23) Cutler (1984), 9.
 - (24) カタログ本編に掲載された51写本のうち、4点は同カタログ内で他の番号が振られている写本の断片に過ぎない。したがって47写本となる。
 - (25) Cutler, *Ibid.*
 - (26) バナキ美術館 cod. 68 (vitr. 34. 3)、ディオニシウ修道院 cod. 65、ヴァトベディ修道院 cod. 760、オックスフォード大学クライスト・チャーチ・カレッジ MS. Gr. 61、プリンストン大学美術館 acc. no. y1930-20、アギア・エカテリニ修道院 cod. gr. 61、マルチャーナ図書館 cod. gr. Z. 17。
 - (27) 'Princeton Art Museum', <http://artmuseum.princeton.edu/collections/objects/25290> (2018年8月15日最終閲覧) で閲覧可能。
 - (28) Cutler (1984), 99.
 - (29) *Ibid.*
 - (30) *Ibid.*, 43.
 - (31) Vocotopoulos, P. (2002), *Byzantine Illuminated Manuscripts of the Patriarchate of Jerusalem*, Athens/ Jerusalem, 73.
 - (32) Cutler (1984), 8.
 - (33) Der Nersessian, S. (1970), *L'illustration des psautiers grecs du moyen âge II*, Londres Add. 19352, Paris, 107.
 - (34) Cutler (1984), 9.
 - (35) 大英図書館 Add. MS. 19. 352、大英図書館 Add. MS. 40. 731、モスクワ国立歴史博物館 cod. Khludov 129d、ヴァティカン聖使徒図書館 cod. Barb. gr. 372。
 - (36) 'Digi Vat Lib', https://digi.vatlib.it/view/MSS_Barb.gr.372 (2018年8月15日最終閲覧) にて閲覧可能。
 - (37) 註解的挿絵の概要については Anderson, C. (2006), 'The Creation of the Marginal Psalter' in Armstrong, P. (ed.), *Ritual and Art: Byzantine Essays for Christopher Walter*, London, 52-61を参照。
 - (38) 七十人訳聖書版の詩篇は未だ邦訳が刊行されていない。以下聖書の文言の訳は辻 (2012)、109-11頁から引用した。
 - (39) 同書、109-12頁。
 - (40) Lowden (1988), 258.
 - (41) 補遺を参照。

- (42) Weitzmann, K. (1980), 'The Sinai Psalter cod. 48 with Marginal Illustrations and Three Leaves in Leningrad' (first published in 1973), *Byzantine Liturgical Psalters and Gospels*, London, VI, 10.
- (43) D.O. 3, fol. 86v にもヨアンニスという名の修道僧を描いた挿絵があるが、15世紀以降に追加されたものである。筆者はヨアンニスを写本の本来の注文主とは見なさない。なお、当該の fol. 86v は現在所在不明である。Der Nersessian (1965), 182; fig. 26.
- (44) Cutler, A., Weyl Carr, A. (1976), 'The Psalter Benaki 34.3. An Unpublished Illuminated Manuscript from the Family 2400', *REB* 34, 313-14; fig. 4.
- (45) Spatharakis, I. (1976), 'The Date of the Illustrations of the Psalter Dinoyiou 65 (πίν. 94-99)', *ΔΧΑΕ* 8, 175-76.
- (46) Vocotopoulos, P. (1976), 'Ένα άγνωστο χειρόγραφο του κωδικογράφου Ιωάσαφ και οι μικρογραφίες του: το ψαλτηριο Christ Church Arch. W. Gr. 61 (πίν. 100-104)', *ΔΧΑΕ* 8, 179-80; 186-88. 写字生ヨアサフについては Politis, L. (1977), 'Quelques centres de copies monastiques du XIVe siècle', *La paléographie grecque et byzantine (Colloques internationaux du Centre National de la Recherche Scientifique, DLIX)*, Paris, 291-95を参照。
- (47) Cutler (1984), 112-15.
- (48) Furlan, I. (1978), *Codici greci illustrati della Biblioteca Marciana*, v. 1, Milano, 46-48; fig. 36.
- (49) Lazarev, V. (1995), 'An Illuminated Constantinopolitan Psalter from the Eleventh Century', *Studies in Byzantine Painting*, London, 250-51; fig. 1.
- (50) Vocotopoulos, (2002), 72-73.
- (51) ヴァトベディ修道院 cod. 760 (fol. 79v; 218v)、ホートン図書館 MS. Gr. 3 (fol. 8v)、エルサレム総主教座図書館 cod. Taphou 51 (本来のフォリオ番号は不明)、ニューヨーク公立図書館 Spencer Collection, Gr. MS. 1 (fol. 403r)。
- (52) Taphou 51. 左下で跪拝している人物はその姿を恐らく故意に掻き消されてはいるが、僅かに残る衣服の部分の顔料が黒いため、修道僧であると考えられる。当該のフォリオは19世紀に持ち去られ、現在サンクトペテルブルク国立図書館の所蔵となっており、本来の写本においてどの箇所挿入されていたのかも判明していない。当地での所蔵番号は cod. gr. 274. Cutler (1984), 45; fig. 157.
- (53) とはいえ、当時のビザンティンの王侯貴族は晩年になると修道院に隠棲し、修道僧・修道尼として最期を迎える習慣があったことを念頭に置く必要がある。例えばコーラ修道院のパラクリシオンに造営された墓のうち、被葬者の肖像が残っているものは、すべて故人を修道僧・修道尼として描いている。Underwood, P. (1966), *The Kariye Djami*, v. 1, New York, 270.
- (54) ただし、写字生によって行数が前後するのが普通であり、総行数も全ての作例で一致する訳ではない。Schneider, H. (1949), 'Die biblischen Oden in Jerusalem und Konstantinopel', *Biblica* 10, 442-45.
- (55) コンスタンティノポリス方式では詩篇全体を68の「アンティフォン」と呼ばれる節に分割する。一方エルサレム方式では全体を20の「カティスマ」に分割し、さらに各カティスマを3つの「アンティフォン」に分ける。Anderson, J., Parenti, S. (2016), *A Byzantine Monastic Office, 1105 A.D.: Houghton Library, MS gr. 3*, Washington, D.C., 261-65.
- (56) *Ibid.*, 265.
- (57) Schneider (1949), 445.
- (58) 中期ビザンティンではある程度句読点法が発達していたため、スティコメトリーであれば本来行が分かれるべき場所で逐一改行することはない。このような筆写方法では羊皮紙を浪費するという現実的な理由もあってか、実際は行の終末に読点を打ち、直後に次の行を書くという筆写方法が採られている。つまりどちらのスティコメトリーを採用していても見た目には変わらない。したがって、筆者は読点の数、もしくはイニシャルの数を数えて行数を確定した。
- (59) ただし当写本の挿絵は他の写本と比べると異質な線描のみの挿絵であり、様式的にもテキストの筆写年である1403年より新しい印象を受ける。挿絵のみが後代に追加された可能性を確認する必要があるだろう。

‘TECA Digitale’, <http://teca.bmlonline.it/ImageViewer/servlet/ImageViewer?idr=TECA0000050661#page/1/mode/lup> (2018年8月15日最終閲覧) にて写本の全フォリオを閲覧可能である。

- (60) 現在の所蔵箇所情報はフランスの l’Institut de recherche et d’histoire des textes が運営するギリシア語写本のデータベース ‘Pinakes’ <http://pinakes.irht.cnrs.fr/notices/cote/9275/> (2018年8月15日最終閲覧) による。当写本は以前ベルリン州立図書館が所蔵していた。ベルリンからクラクフに写本が移された経緯を筆者は承知していないが、各文献においては本来の所蔵箇所を尊重して「ベルリン州立図書館 cod. 8. 13」と呼ばれることが多い。混乱を避けるため、写本番号についてはあくまで現在の所蔵箇所に従う。
- (61) 当写本は1970年以降スイスの一個人が所有していたもので、カトラーのカタログ始め多くの文献には当時の所蔵情報が記載されている。しかし2001年にメトロポリタン美術館が購入したことは特段知られていない。両写本が同一であることは、筆者も2018年6月にメトロポリタン美術館にて行った現地調査で、写本購入時の資料から確認した。カヴルス＝ホフマンのカタログには現在の所蔵者が正しく記載されている。Kavrus-Hoffman, N. (2007), ‘Catalogue of Greek Medieval and Renaissance Manuscripts in the Collections of the United States of America’, *Manuscripta* 51 (1), 89–90.

【後記】本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号18J10507）の助成を受けたものである。